

第 44 回山形県母性衛生学会学術集会プログラム

12:00 開会

◆ 一般口演・委託研究報告

12:00~12:30

座長 山形県立保健医療大学 菊地 圭子

コロナ禍前後の褥婦のメンタルヘルス

○岸あき子 太田久美 渡辺美紗登 田村文香（済生会山形済生病院）

委託研究報告

COVID-19 感染症流行下で開催されたオンライン母親教室に参加した妊婦の思い

○藤田愛 手塚美春 鈴木美春（山形大学医学部看護学科）

◆ シンポジウム「ライフサイクルを見据えた妊娠・育児期の糖代謝異常女性に対する支援」

13:00~15:00

進行 山形県立保健医療大学 平石皆子

コーディネーター 自治医科大学看護学部教授 成田伸

シンポジスト 1 周産期の糖代謝異常の病態・診断・治療とその支援の考え方

～妊娠糖尿病既往女性の 2 型糖尿病発症予防と在宅妊娠糖尿病患者指導管理料～
自治医科大学看護学部教授 成田伸

シンポジスト 2 ライフサイクル全般の糖尿病患者に対する看護実践

南陽矢吹クリニック 糖尿病看護認定看護師 井淵奈緒美

シンポジスト 3 周産期の糖代謝異常女性に対する看護実践（妊娠糖尿病女性への実践事例含む）

杏林大学付属病院総合周産期母子医療センター 師長補佐 関田真由美

シンポジスト 4 周産期の糖代謝異常患者に対する栄養指導

済生会山形済生病院 管理栄養士 森幹子

〈企画意図〉

周産期の糖代謝異常は、女性の一生涯、そして産まれてくる子どもにも影響する。糖代謝異常をもつ妊婦や産後早期の母親に対しては、食事や体重管理のほか、授乳や育児といった周産期特有の生活の中での血糖コントロールが必要となる。

在宅妊娠糖尿病管理料が妊娠中だけでなく産後 12 週まで拡大といった背景もふまえ、妊娠期育児期だけでなく、女性のライフサイクル全般の視点から糖代謝異常女性に対するケアの重要性を再確認し、女性の生活を支える支援について現在の課題と課題解決方法を討議する。

15:00 閉会

一般演題・委託研究報告

コロナ禍前後の褥婦のメンタルヘルス

○岸あき子 太田久美 渡辺美紗登 田村文香（済生会山形済生病院）

【目的】

晩婚化、晩産化の傾向に加え不妊治療による高齢挙児希望者が増加し現代は子供を産み育てることに困難を感じ、また家族関係の変化も加えて妊産婦のメンタルヘルスの問題が生じやすいと言われている。令和2年より新型コロナウイルス感染が拡大し、面会制限や立ち合い分娩中止、行動規制などの感染対策が行われた。厳しくなる感染対策の中で産後の入院期間は短く、家族の面会の中で誕生を祝い、頑張りを労いサポートを受けられていた従来の環境が短期間で変化していったことは褥婦のメンタルヘルスに大きな影響があると推測した。本研究の目的はコロナ禍前後の褥婦のメンタルヘルスを明らかにすることである。

【方法】

令和元年10月から令和2年9月の当院で出産した702人を対象とし有効回答672人。病棟の助産師が「エジンバラ産後うつ病問診票（以下EPDS）」と「赤ちゃんへの気持ち質問票」を産後入院中の褥婦から対面で聴き取りした。聴き取る際は単に点数化するのではなく、質問票使用にあたっての留意点に従い、褥婦の気持ちに寄り添いながら丁寧に聴き取りを行った。EPDSは10項目から構成され合計得点9点以上は周産期うつ病の可能性が高いと評価される。「赤ちゃんへの気持ち質問票」10項目から構成され得点が高いほど子どもへの否定的な感情が強いと評価される。入院中の面会制限なし・立ち合い制限なし（令和元年10月～令和2年3月：コロナ禍前）と入院中の面会制限あり・立ち合い制限あり（令和2年4月～令和2年9月：コロナ感染拡大後 以下コロナ禍後とする）の2つの時期で比較した。研究実施にあたり施設の倫理審査の承認を得るとともに病院のウェブサイトには本研究に関する情報と研究に同意しない場合の連絡方法を掲載した。

【結果】

コロナ禍前284人、コロナ禍後388人を分析した。EPDS合計得点9点以上は、コロナ禍前は49人（17.3%）、コロナ禍後は63人（16.2%）であった。抑うつ因子を確認する「悲しくなったり、惨めになったりした」と「不幸せな気分だったので泣いていた」は、コロナ禍後は、コロナ禍前に比べて1点以上の得点をつけた者の割合が有意に高くなった。赤ちゃんへの気持ち質問票の総合得点3点以上は、コロナ禍前81人（28.5%）、コロナ禍後121人（31.2%）であった。項目ごとにコロナ禍前後で0点と1点以上の割合を比較したところ、どの項目でも統計的な有意な差はみられなかった。

【考察】

EPDSについてコロナ禍前後で有意差が見られた抑うつ状態を表す項目が増加した要因として、コロナ禍の規制や制限が十分な情報を得る機会を奪うことになった。またコミュニケーションの形の変化から学ぶ機会、支援を受けることが不十分であるため漠然とした不安につながっているのではないかと考える。その他の項目はコロナ禍前後で差が見られなかったのは厳しくなっていく感染対策の中で携わる助産師が十分な寄り添いを行い温かい心を込めたケアの提供があったからではないかと考える。また家族とのかかわり方を模索しながら分娩時や入院中にテレビ電話を使用したり、産声を録音したり、児の写真を撮ったことが結果に結びついたのでと考える。

【委託研究報告】

COVID-19 感染症流行下で開催されたオンライン母親教室に参加した妊婦の思い

藤田愛、手塚美春、鈴木美春（山形大学医学部看護学科）

【目的】

本研究は、オンライン母親教室を開催している 1 団体が集計した妊婦のアンケートを基に、オンライン母親教室への思いについてテキストマイニング分析し、今後の母親教室の開催形式の在り方を検討することを目的とする。

【方法】

- 1) 調査対象と調査期間：2020 年 5 月から 2021 年 3 月、A 団体が開催しているオンライン母親教室に参加し、アンケートに回答した妊婦 663 名。
- 2) データ収集方法と分析：オンライン母親教室の参加者アンケートの二次データの“出産経験”、“一緒に参加した方”、“希望開催日時”、“セミナーの満足度”、“オンライン母親教室に参加した感想（自由記述）”である。分析は、自由記述の内容を言語学的解析法の一つであるテキストマイニング手法を行い、出現回数が多い語について共起関係をみた。
- 3) 倫理的配慮：使用した二次データは、個人情報とリンケージされておらず、対象者は特定されない。また、データ使用にあたっては、A 団体から使用許可を得、同意書を双方で保管した。本研究は、山形大学医学部倫理審査委員会の承認を得て、実施した。（倫理審査承認番号：2021-69）

【結果】

対象者は初産婦が 577 名（95.8%）であり、267 名（44.4%）が夫と参加していた。希望開催日時は、週末が 60.2%と一番多かった。セミナーの満足度は、大変満足、満足あわせて 98.8%であった。

〈オンライン母親教室に関する共起関係〉

「オンライン」、「母親」、「教室」、「学級」には「出産」、「不安」、「夫」などが共起しており、『コロナで母親教室が全て中止となり…』や『出産に対して不安が軽減した』といった意見があり、COVID-19 感染症流行による母親教室の中止や出産に対する不安、オンライン母親教室開催に対する感謝の言葉がみられた。また、『オンラインなので夫も一緒に気軽に参加できた』、『体調の不安もなく自宅から受講できる』などの意見もあった。さらに、「受講」、「助産」なども共起しており、『自宅でリラックスして受講できた』や『助産師から直にお話を聞ける』、『つながっている安心や前向きな気持ちも感じる事ができた』など、オンライン母親教室の受講により精神面での効果を感じていた。「沐浴」には「動画」、「見る」などが共起しており、『実際に沐浴している動画を見ながら説明を聞くことができ…』など、沐浴の方法について理解している言葉が述べられていた。「赤ちゃん」には「産後」、「知る」、「自分」などが共起しており、『産後の赤ちゃんの特徴を知ることができた』など、産後の赤ちゃんとの生活について理解しイメージすることができていた。

【結論】

オンライン母親教室に参加した妊婦は、COVID-19 感染症の流行により病院や自治体での母親教室が中止になったことへの不安や、妊娠・出産・育児に関する不安を抱えており、助産師の話を聞き、沐浴の方法や産後の赤ちゃんとの生活などを理解しイメージすることは不安の軽減につながっていた。また、助産師の話を聞く中でリラックス効果や安心感、前向きな気持ちを感じており、助産師との繋がり場を必要としていた。さらに、移動の負担がなく、パートナーも参加しやすいと感じていた。

以上より、従来のような妊婦同士の交流や演習方式への課題はあるが、妊婦やパートナーが参加しやすいオンライン母親教室は、COVID-19 感染症の終息後も開催する意義があることが示唆された。